

〔11月2日／死者の日〕

〔説教〕

「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであ[る。]」
「死者の日」である今日、私たちは、この福音を分かち合うために、こうして集まっています。

そして、それぞれの生活の中で、この福音を宣べ伝えるために派遣されていきます。

まず、「子を見て信じる」ということについて考えてみたいと思います。

御子を見て信じるということは、御子に出会い、御子が生きておられるということを信じるということではないでしょうか。

私たちは、子を見て信じているでしょうか。信じていると断言できます。主イエスが生きておられると信じているから、こうして集まって、祈っているのです。主イエスのみ名によって、集まり、祈っているのです。

教会に行けなくても、祈っているのです。今祈ることができなくても、いつか祈りたいと願っているのです。祈れないことに悲しみを感じているのです。この願いこそ、この悲しみこそ、主が生きておられることを証しているのです。

だから、願い続けたいと思います。悲しみを忘れないようにしたいと思います。

主は、どのような時も、私たちとともに生きてくださるのです。

私たちが願っていることは、幸せに生きるということです。

今幸せでなかったら、いつか幸せになりたいと願っています。そして、主イエスのように生きることが、幸せな生き方であると信じています。そして、主のように生きることが、「永遠の命」と呼ばれている生き方です。

永遠の命は、「モノ」ではありません。主のように生きる「コト」です。

次に、「永遠の命」について考えたいと思います。

「永遠の命」とは、死なないということではありません。ただ生き続けるということではありません。神の愛によって生かされることです。神に愛されていることに喜びを感じることです。神に愛されたように、まわりのいのちを愛することができた時、喜びを感じることです。

愛することができない時、悲しみや痛みを感じることです。今は愛せなくても、いつか愛せるという希望を持てることです。私たちはもう、永遠の命を得ています。完全に愛せるからではありません。愛せないことに悲しみを感じているからです。

主イエスのように、愛せるようになりたいという願い、愛せる時が来るという希望がある限り、永遠の命は始まっているのです。

私たちは、永遠の命を得ているからこそ、この世界で、さまざま苦しみを経験します。主イエスも、この世界の中にある十字架によって、大きな苦しみの中で亡くなられました。この世界にあって、永遠の命とは、苦しむいのちであると言えます。この世界で生きている限り、愛には、悲しみや痛みがともなうからです。しかし、永遠の命は、苦しみで終わるいのちではありません。「終わりの日に復活」するいのちなのです。復活とは、愛の苦しみが愛の喜びに変わることでないでしょうか。

私たちより先に亡くなった人たちは、愛の苦しみから解放されて、愛の喜びのうちに生きていると、私たちは信じています。死は、愛の喜びの始まりであると言えます。私たちは今日、すべての死者とともに祈ります。終わりの日に、皆で、愛の喜びを分かち合えることを願って祈ります。私たちは、「聖徒の交わり」を信じています。それは、愛の交わり、愛の喜びの分かち合いです。この交わりに、すべての人が加わる日が来ることを、心から祈ります。

私たちは昨日、「諸聖人」の祭日を祝いました。第二バチカン公会議の教えによれば、私たちは皆、聖人となるように召されています。主イエスのように生きることで、主のように祈ることで、まわりのいのちを愛することで、聖人となるように招かれています。私たちは、すでに永遠の命を得ているので、聖人となることができます。希望の巡礼は、聖人になっていくための歩みです。すべての死者とともに、神の愛のうちに、この愛の巡礼の道を歩んでいきましょう。